

2020年11月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、極渦は北米側で強かった。北米東部～北大西洋中緯度帯の中部、ユーラシア大陸北部の広い範囲、日本付近～北太平洋中緯度帯で正偏差が見られ、特にヨーロッパで顕著だった。中央アジア、東シベリアで負偏差となった。200hPa 風速をみると、偏西風は東アジア～北太平洋中緯度帯、北米～北大西洋中緯度帯で平年よりも北寄りを流れた。海面気圧をみると、北極域で顕著な負偏差、中緯度帯の広い範囲で正偏差となる環状の偏差パターンが卓越した。シベリア高気圧は平年の位置と比べて西側で強く、アリューシャン低気圧は平年よりも北に偏った。850hPa 気温をみると、ユーラシア大陸北部の広い範囲、東アジア、北米中部～東部で高温偏差、北米北部、中央アジアで低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド洋赤道域、カリブ海～南米北東部で活発、太平洋赤道域の日付変更線付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の後半にインド洋を東進した。対流圏上層では、アフリカ～インド洋西部、太平洋熱帯域の東部で南北半球対の高気圧性循環偏差、太平洋熱帯域の西部～中部で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、北インド洋、カリブ海付近で低気圧性循環偏差、太平洋熱帯域の西部～中部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、アフリカ、太平洋～南米で正偏差、イン

ド洋～インドネシア付近で負偏差となった。南方振動指数は+0.8だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.45℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、11月として2番目に高い値となった。11月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.74℃/100年(速報値)である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

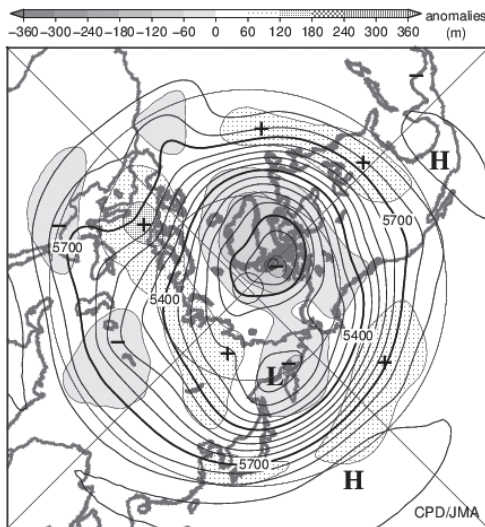
- シベリア北部～ヨーロッパ北部、ヨーロッパ南部～北アフリカ北部、西アフリカ西部～中部アフリカの中部、米国東部～南東部、米国南部～メキシコ中部、ブラジル西部及びその周辺、オーストラリア北部～南東部で異常高温、中央アジア南部～南アジア北西部で異常低温となった。
- モンゴル中部～朝鮮半島北部、米国東部～中米中部、ブラジル北部で異常多雨、ヨーロッパ西部～中東北西部、ブラジル西部～ウルグアイで異常少雨となった。

(気象庁 大気海洋部 気候情報課)

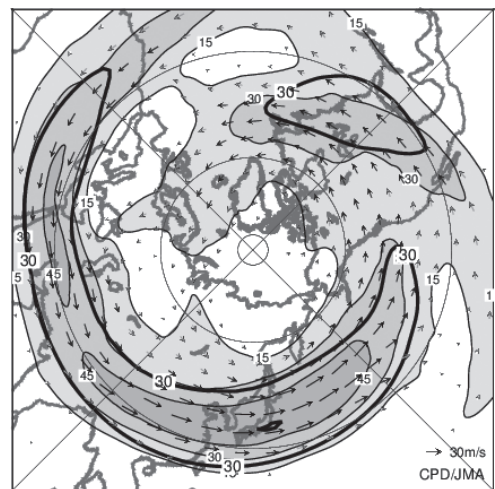
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ

「気候系監視速報」をご覧ください。

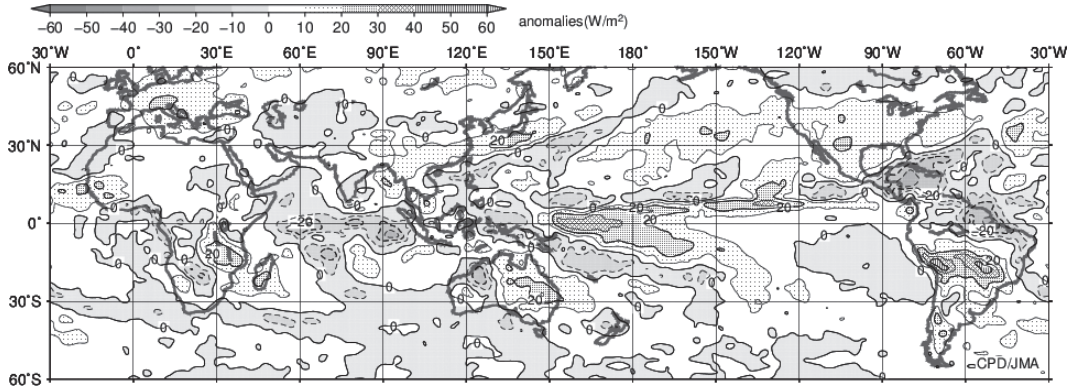
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2020年11月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1981～2010年の平均値。

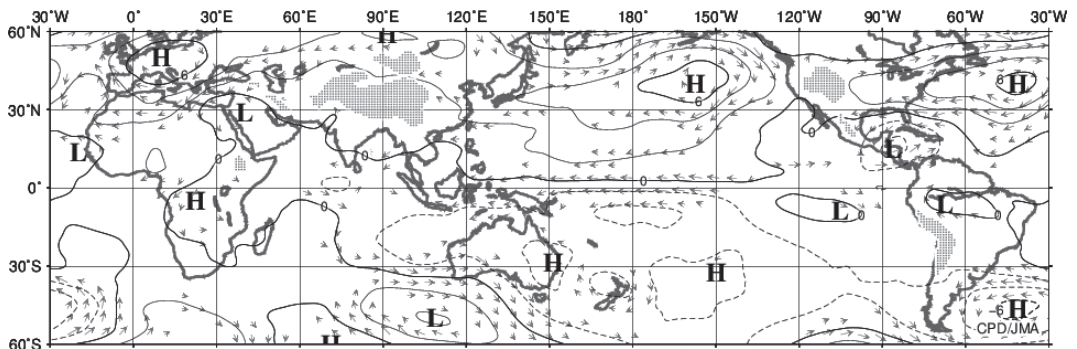


2020年11月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は15m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は30m/s。平年値は1981～2010年の平均値。

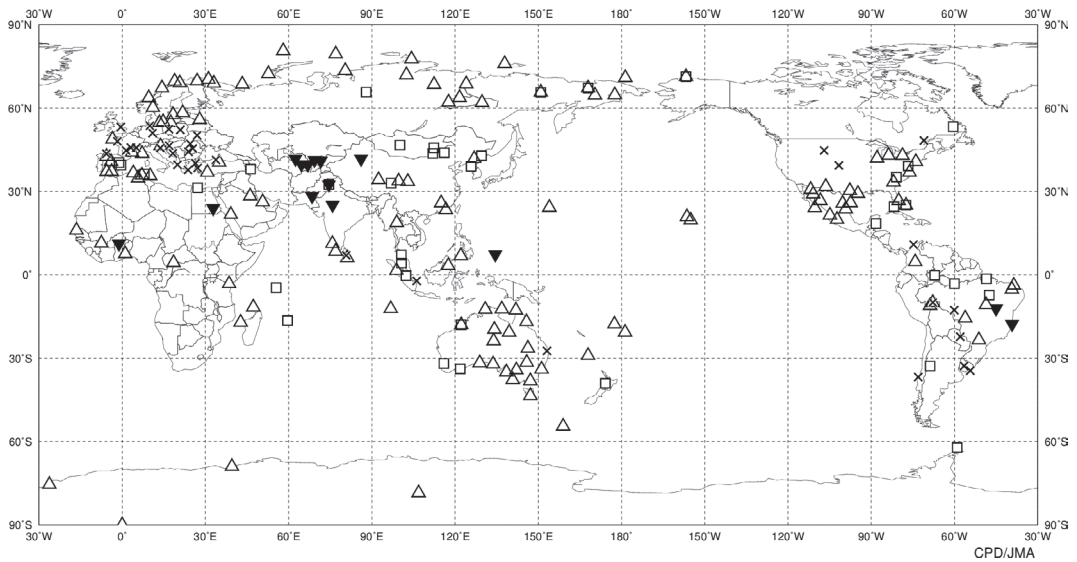


2020年11月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。平年値は1981~2010年の平均値。



2020年11月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル
流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。平年値は1981~2010年の平均値。



2020年11月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。